



ほうさ 第29号

1987年1月

名古屋市蓬左文庫

Nagoyashi Hôsabunko

展 示 室 よ り

武家の礼法

—小笠原流伝書展—

1.17(土)~3.22(日)

[2.19(木)・20(金)展示替休室]

当文庫が所蔵する「小笠原流伝書」と名づけられた約500点の資料群は、故実礼法を家職として代々尾張藩に仕えた朝岡家（文政13年に小笠原に改姓）に伝わったものである。

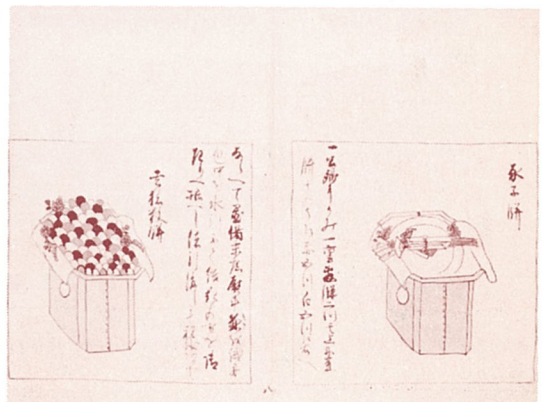
朝岡家は、はじめ青山を称し、初代弥次兵衛忠令の時に、家康の家臣から幼少の義直に属し、代々尾張藩に仕えた家であった。忠令の子令国は、父の遺蹟300石を継ぎ、一時川並奉行などをも勤めたが、寛文11年（1671）藩主から、朝岡と改姓し、諸礼の家となることを命ぜられた。令国が改姓を命ぜられた朝岡姓は、妻の実家の姓にあたり、寛文3年（1663）すでに、令国は、舅の朝岡弥五右衛門国豊から、尾張藩の諸礼についての伝授を受けていた。この朝岡家は、三河の出身、伊予守泰国の時に家康に仕え、長子泰勝は秀忠に仕え、幕府の旗本となったが、次子国豊は、松平忠吉に仕え、後に義直に属した。この家には、武家諸礼、有職故実の伝統があったものらしく、国豊が令国に伝えた礼法は、泰国から伝えられたものであった。初期尾張藩の礼法に通じていた国豊は、寛文6年に病没するが、生前に藩に知行を返上しており、このため、当時近藤姓を名乗っていた正重が、藩の命によって朝岡家を継承し、この家も礼法方などの職を勤めた。

一方、令国が朝岡姓を名乗って、諸礼の家となったのは、令国の礼法についての知識・技量と、藩主の信任によるものであったと思われる。

朝岡家は、御側寄合に属し、役職では、小姓、書院番、御小納戸など、藩主の側近く仕えることが多かった。諸礼の家としては、公式行事の際、見習のうちは給仕などを勤め、当主となると、婚礼、元服などの儀式を実際に取り仕切る御用係を勤めた。

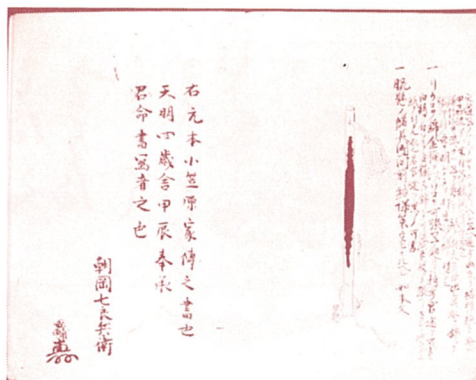
国命の代までの朝岡家が、諸礼の家として儀式的御用係を勤める際の礼法は「御当家躰法式」と呼ばれるものであった。これは、何流の礼法というものではなく、尾張家の礼法とも言うべきもので、古来からの礼法と家康以来の慣例を中心に泰国、国豊から伝えられたものを基本とし、尾張藩代々の儀式的慣例によって形づくられていったものと考えられる。ところが、五代目国輔の時、九代藩主宗睦は、朝岡家に対して、小笠原流を学ぶことを命じたのである。安永9年（1780）、国輔は、見習中の嫡子国雄を伴って江戸の小笠原平兵衛家へ入門した。以来、朝岡家代々の当主、嫡子は、江戸の小笠原家で小笠原流を学び、その際に、小笠原家の所蔵している伝書を書写して持帰ったため、小笠原流の伝書が朝岡家に伝えられることとなったのである。ちなみに、江戸に滞在して礼法を学ぶのに要した経費は、すべて藩費によって賄われていた。

宗睦が朝岡家に入門を命じた小笠原家は、鎌倉幕府に仕え、弓馬術に優れていることで知られ、室町時代の中頃、京都の小笠原家が室町幕府の弓馬故実師範となり、伊勢氏



「朝岡小笠原流躰法五節句飴物次第」

と並んで幕府の故実儀礼を扱った。これによって、幕府衰退後も、一族は各地の諸大名家に武家故実の伝授をもって仕えた場合が多く、江戸時代には、信濃小笠原家系の平兵衛家と京都系の縫殿助家が、武家礼法、弓馬故実の家として幕府に仕えた。江戸幕府の諸礼式は初期においては室町幕府の故実を基本とし、漸次、幕藩体制の理念に即して整備されていったもので、家綱期以降、綱吉、吉宗にかけての時期に完成されたとされる。小笠原家はこうした時期に弓馬儀礼の制定への参画をはじめ、婚儀、誕生、元服などの諸式典の御用係などを勤め、幕府の礼法を伝える家としての立場を確立していったものと考えられる。



「武具之伝書」

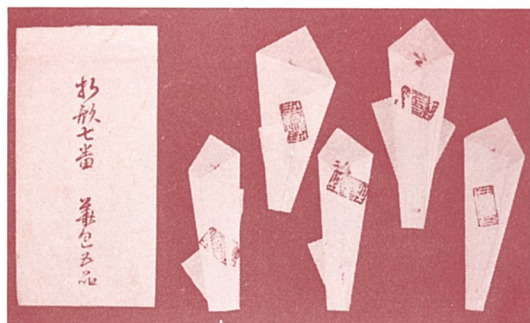
宗睦の治世には、藩政改革が行われ、職制や軍制などにおいて様々な改革が行われている。朝岡家に小笠原流を学ばせたのも、幕府の諸礼式が整備されたのに伴って、古式を基本としていた尾張藩の礼法を改革し、整備しようとしたものであろう。朝岡家が、江戸で学んだ小笠原流の礼法は、同家の驍法の道場で藩士に伝授されるとともに、藩校明倫堂においても講義された。

朝岡家が国輔・国雄・国軌の三代にわたって江戸の小笠原家で書写した小笠原流の伝書は、274件394冊におよび、そのほとんどが当文庫に残されているが、どの伝書の最後にも、「奉君命書写者也」という文言が記された筆者の奥書がある。国輔の代には、安永9年から天明5年(1785)までの5年間に76件151冊、国雄の代に、寛政8年(1796)・9年・12年、享和3年(1803)で23件35冊、国軌の代に、文政5年(1822)・6年・11年～天保4年(1833)・6年～10年、弘化3年(1846)～嘉永2年(1849)で175件208冊が書写されている。もっとも、精力的に伝書を書写した国軌の代となると、朝岡家の礼法は、ほとんど小笠原流の礼法と変わらないものであったと思われる。文政13年(1830)には、長い間の国軌の念願がかない、小笠原姓を名乗ることが小笠原平兵衛家から許された。これ以後、朝岡家は、小笠原姓を名乗り、次代の国豊の代をもって明治維新を迎えたのである。

現在当文庫が所蔵する朝岡家の資料のうち、そのほとんどは、国輔以来三代にわたって写された小笠原流の伝書である。その内容は、諸礼式から兵法、弓馬術、さらに礼式に伴う雛型、折型まで、小笠原流伝書の全貌に近いものと言える。このほか、朝岡家の勤書、尾張藩の婚礼の御用係を勤めた際に、役人同士で協議・連絡を行った書状類、御用留など、尾張藩の婚礼の様子を知る資料なども含まれており、藩政資料としても興味深い資料群と言えよう。

＜参考文献＞

二本謙一「室町幕府弓馬故実家小笠原氏の成立」(『国学院大学日本文化研究所紀要』24)「江戸幕府八朔参賀儀礼の成立」(『日本歴史』昭和61年11月)



「折型七番 華包五品」

＜朝岡(小笠原)家・青山家系図＞



「武家の礼法」 出品目録

〈朝岡家〉

1. 御当家の書 寛文3年朝岡国豊伝授 (青山弥次兵衛宛) 2冊
2. 太刀折紙抄 同 1巻
3. 式御成之次第 同 1巻
4. 士林浜洩 巻九 松平秀雲等編 江戸末期写 1冊
5. 御書物目録 写 1冊
6. 礼容抄 安永9年6月朝岡国輔著 寛政4年11月朝岡国雄写 1冊
7. 武家和礼記行 寛政8年4月国雄著 (自筆) 1通
8. 年頭御老中御招請留帳 写(安永2年1月奥書) 1冊
9. 淑姫君様御用懸り留帳 寛政11年6月～12月 国雄筆 6冊
10. 御細工所御支度之分御問合 文政5年5月朝岡国輔写 1冊
11. 三百八十御餅五種五荷絵図 同 1冊
12. 御婚礼御配膳御酌之次第 写 1冊
13. 御婚礼御規式之御次第 写 1冊
14. 〔御婚礼諸式之次第〕 写 8折
15. 〔朝岡弥十郎宛苗字讓状〕 文政13年10月小笠原平兵衛 1通
16. 〔改姓につき同書ならびに申渡書〕 〔文政13年〕10月朝岡弥十郎 1通
17. 〔小笠原弥十郎宛奥儀免許皆伝証文〕 天保10年9月小笠原常昭 1通

〈小笠原流伝書—礼法—〉

18. 名目録鈔 文政5年7月国輔写 2冊
19. 十巻書 写 2冊
20. 諸祝儀集 文政5～天保7年国輔写 4冊
21. 陰陽祝言 文政12年正月国輔写 2冊
22. 陰陽祝言略式 文政5年12月国輔写 1冊
23. 嫁入之次第 文政12年正月国輔写 1冊
24. 女中集 安永9～天明元年国輔写 5冊
25. 女礼集伝記 天明元～3年国輔・寛政8年12月国雄写 15冊
26. 後宮名目 寛政12年3月国雄写 1冊
27. 女礼議抄 同 5冊
28. 嫁入次第・嫁入道行次第・献立次第 寛文5年武元次郎太夫伝授 (清水権左衛門宛) 1巻
29. 膳部方之書 寛政9年正月国雄写 2冊
30. 同 天保7年6月国輔写 1冊
31. 膳部之次第 安永10年国輔写 2冊
32. 当流膳部之書 嘉永2年3月国輔写 1冊
33. 庖丁切手秘伝書 天明4年国輔写 1冊

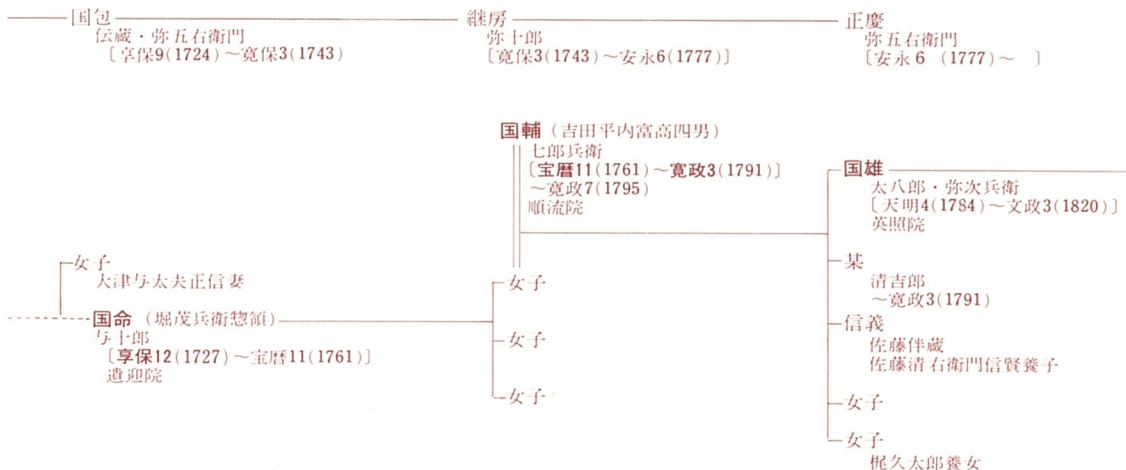
34. 銚子巻 写 1冊
35. 真式三献引渡神引渡之次第 天保5年5月国輔写 1冊
36. 銚子提子之包様 写 1通
37. 書札并御内書雜記 天明2年国輔写 1冊
38. 書札 同 3冊
39. 書札礼法・書札之次第・書札之問書 寛政8年11月国雄写 1冊
40. 鷹之書 天明2年国輔写 1冊
41. 鷹之足緒留様 天保8年8月国輔写 1冊
42. 鷹之名所 写 1枚
43. 図式 天明4年国輔写 1冊
44. 唐櫃の緒懸やう・貝桶寸法・緒の寸法・立這子の絵図・胸の守袴やう絵図・筒寸法拵様・ほかの寸法・緒の懸様 寛政11年10月国雄写 1冊
45. 土器之図 天保9年6月国輔写 1冊
46. 香灰灰押様同置合之図 文政13年正月国輔写 1冊
47. 陶器令 写(寛政10年若林正令奥書) 1冊
48. 殿中御座敷荘之次第 写(文政12年8月国輔奥書) 1冊
49. 御厨子黒棚荘様 写 1冊
50. 朝岡小笠原流儀法五節句飾物次第 写 1冊
51. 万渡請取之次第 天明元年国輔写 2冊
52. 万披露納之次第 同 1冊
53. 万為視様瞻様之事 文政12年6月 1冊
54. 万言様之事 同 2月 1冊

〈軍学・軍礼・武具〉

55. 軍要集 安永10年国輔写 10冊
56. 軍鑑要法天理巻 天保2年7・10月天保6年6月国輔写 6冊
57. 武具之伝書 天明4年国輔写 2冊
58. 甲冑之書 安永9年国輔・文政5年国輔写 4冊
59. 軍器雜集 天保7年4月国輔写 1冊
60. 磨団扇・太鼓・先勝最之図 貝・鉦・鐘・八方掛之図 安永9年国輔写 1冊
61. 甲忍之緒真行草留様極秘伝 写(文政12年国輔奥書) 1冊
62. 使頭引接礼 天保9年10月国輔写 1冊
63. 幕之書 文政12年7月国輔写 1冊
64. 制札・目安・首実検・首桶・馬具・幕・内幕・団之図・鞭之図 寛文5年武元次郎太夫伝授 (清水権左衛門尉宛) 1巻

〈弓術〉

65. 射法全書 天明2年国輔・寛政8年12月国雄写 3冊
66. 円物之日記・草鹿之日記 安永9年国輔写 1冊



67. 挟物之事 天明元年国輔写 1 冊
 68. 〔小串之書・草鹿書〕 天明2年国輔写 1 冊
 69. 三々九手挟物・大の之作法・百手之作法・誕生之引目作法・屋越之引目次第・矢開之祝儀・矢開之書

70. 同 寛政8年10月国雄写 1 冊
 71. 誕生藝目作法 弘化4年11月国軌写 1 冊
 72. 射具統聚録 天保6年11月国軌写 1 冊
 73. 射具統聚録秘伝書 天保4年10月国軌写 1 冊
 74. 当家弓書 文政11年12月国軌写 2 冊
 75. 当家弓之書 文政12年4月国軌写 1 冊
 76. 〔当流箭本・当流矢本〕

77. 当家矢本 文政12年2月・同13年3月国軌写 1 冊
 78. 弓箭記并弓法撰書矢開 天明2年国輔写 1 冊
 79. 矢之名所 天保9年6月国軌写 1 通
 80. 篋積并羽積之次第 天保7年5月国軌写 1 冊
 81. 誕生藝目次第・弓惣名次第・弓袋次第・的場次第・の之次第・靱絵図

寛文5年武元次郎太夫伝授
 (清水権左衛門尉宛)

82. 弓之部一卷 写 1 卷

〈馬術〉

83. 馬書七疋書 天保7年5月国軌写 1 冊
 84. 乗方并手綱の秘書 天明2年国輔写 2 冊
 85. 馬之手綱口伝之書 天保9年8月国軌写 1 冊
 86. 曲馬調様 天保7年3月国軌写 1 冊
 87. 馬之渡請取画図 文政5年6月国軌写 1 卷
 88. 馬具 天明元年国輔写 1 冊
 89. 馬莊画図 天保9年5月国軌写 1 冊
 90. 鞍鐙轡之名処 同 1 冊
 91. 鞭之次第 弘化3年4月国軌写 1 冊

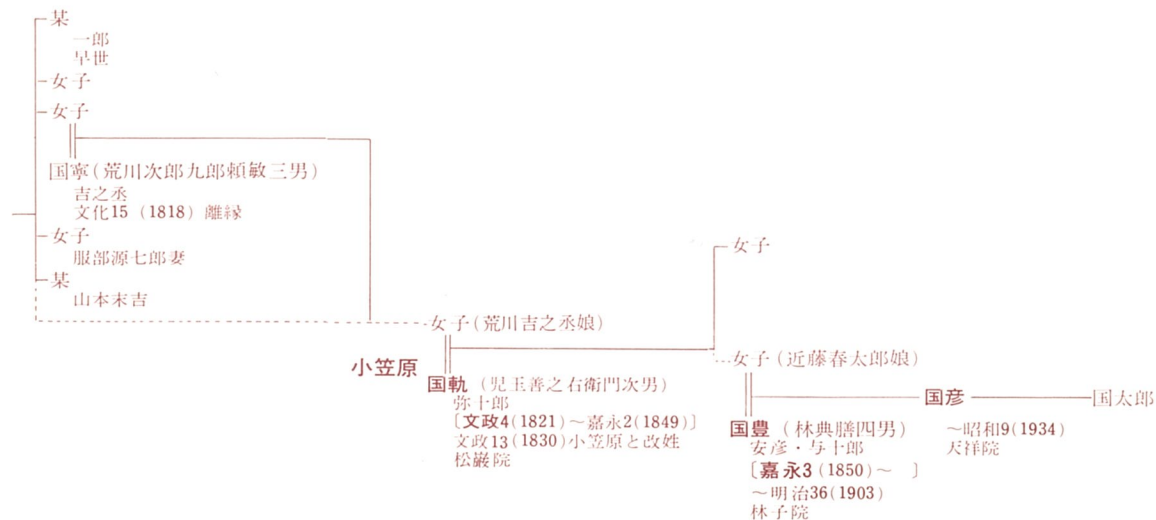
〈騎射〉

92. 犬追物之書 天明2年国輔写 4 冊
 93. 犬追物全書 天明13年10月国軌写 6 冊
 94. 犬追物騎射秘抄 写 2 冊
 95. 犬追物秘伝書 弘化4年7月国軌写 3 冊
 96. 流鏑馬之書 天明元年国輔写 1 冊
 97. 笠懸射并射手出立之事 天保6年8月国軌写 1 冊

〈折型・雛型〉

98. 〔披露状雛型・大〕 12個
 99. 〔 同 小〕 12個
 100. 当流折紙 16個
 101. 丑年伝来公家武家折紙写共 8個
 102. 〔太刀緒掛雛型〕 4個

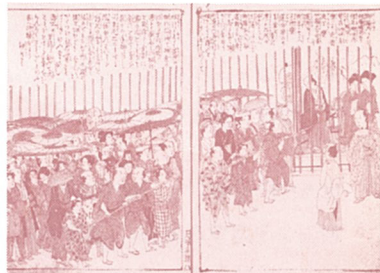
103. 当流太刀雛型 4個
 104. 小笠原流太刀雛型 5個
 105. 同 5個
 106. イ印之内太刀雛型 2個
 107. 護刀袋紐型 3個
 108. 小笠原家太刀留形 安永9年中将様御婚礼之節
 從姫様へ御結納之節留形 1個
 109. 長刀紐留形 3個
 110. 日光御進猷御太刀鐸留様雛型 1個
 111. 大関殿伝授策二 鞆結付方 1個
 112. 腕貫結形 3個
 113. 太刀打刀腕貫打様形 3個
 114. 掛物緒留様 真行草 3個
 115. 掛物紐留形 真行草 3個
 116. 真行舛元服髮結様雛形 3個
 117. 角樽海老封型 国軌代 1個
 118. 角樽結納結形 1個
 119. 〔女中文箱紐留様〕 1個
 120. 唐櫃荷足包形 1個
 121. 〔靱に腰帶留様〕 1個
 122. 〔上帶太刀留様〕 1個
 123. 〔長柄傘留様〕 1個
 124. 小笠原流長柄銚子柄之包様之形 1個
 125. 〔荷イ・食籠紐結様〕 2個
 126. 貝桶行器紐留様 3個
 127. 〔貝桶行器紐結様〕 3個
 128. 炬火之雛形 1個
 129. 虫まじない 1通1個
 130. 鷹足革大緒雛形并絵図面 1通1個
 131. 鎧武者繩掛様 1個
 132. 愛敬守雛型 1個
 133. 〔 同 〕 1個
 134. 諸結様型 15個
 135. うぶき様りくりかけ様 1個
 136. 当時公義御誕生之時産衣包様後藤5調進之節
 非小笠原流 1個
 137. 当流産衣包様 2個
 138. 婚礼皆子餅吹雛型 4個
 139. エンヒ雛形 国軌代 2個
 140. 鎧直垂袴雛型 2個
 141. 緑女かつき 1個
 142. 袖無羽織 2個
 143. 御産刀 男刀女刀 2個
 144. 〔左右挟箱雛型〕 2個
 145. 〔籠雛型〕 2個
 146. 暮日黒札 小笠原国豊修業 1個
 147. 小笠原流御銚子 2個
 148. 小笠原流瓶子 2個
 149. 御かはらけ 3個
 150. 策 4本
 151. こかけ 1足
 152. 折型 1~23番(10・14・15・18・21番欠) 19個



「名古屋叢書三編」の概要

尾張関係資料の翻刻・影印資料集として、各方面より高い評価を受けております「名古屋叢書三編」の刊行については、この欄でもたびたびご紹介していますが、既に全20冊中13冊までが出版されています。収録書目については当初計画から何回かの変更があり、読者の皆様にもご迷惑をおかけしましたが、配本回数も残り少なくなってきましたので、もう一度「名古屋叢書三編」の内容をご紹介します。(★印は既刊分)

- 第1巻 尾張家系譜集** (第20回配本)
「御系譜」(蓬左文庫蔵)等、歴代尾張藩主とその家族の系譜と履歴の詳細な記録集の翻刻で、四谷、大久保・川田久保家等の別家を含む。尾張藩政史研究の根本史料として重要。
- 第2巻 尾藩世記 上** (第14回配本)
尾張藩士阿部直輔が明治初期に著した私撰尾張藩通史「尾藩世記」(鶴舞中央図書館蔵)の翻刻。尾張藩の成立から廃藩までの通史資料として価値があり、叙述内容も各方面にわたり、各資料と対照している点が特色。
- 第3巻 尾藩世記 下** (第15回配本)
同じく阿部直輔編「御年寄勤務年表」(鶴舞中央図書館蔵)の翻刻と上下巻の解説および上巻の総目次を兼ねた尾張藩年表を収録。
- ★第4巻 士林浜廻続編** (第6回配本)
慶長5～元禄6年までに仕官した格式以上の格の尾張藩士の系譜集「士林浜廻」(『名古屋叢書続編』第17～20巻)の補遺・追録である「士林浜廻続編」(鶴舞中央図書館蔵)の翻刻。共に松平君山編で、江戸中期までの各家の系譜をたどることのできる資料として本来一体とみなすべき資料。本文の他、諸本表、各家最終記事年代表、前主・仕官年代・当主履歴表、藩家関係者一覧、家紋一覧等を附載。
- 第5巻 尾張年中行事絵抄 上** (第16回配本)
尾張各地に伝わる年中行事を、彩色画と文章で解説した「尾張年中行事絵抄」(東洋文庫蔵)のカラー影印および翻刻。「猿猴庵日記」「尾張名陽図会」等で有名な尾張藩士高力種信(猿猴庵)が晩年に春～秋(1～8月)を著わし、没後「尾張名所図会」の作者として有名な小田切春江が「9月の部」を加えた。本書は、第1～3冊が写者不明、第4～5冊が春江写、第6～13冊が猿猴庵自筆、第14冊が春江自筆で、貸本屋大物の旧蔵のため手摺れの跡もかなり見られるものの、本来の精密な描写と色彩は失われていない。本叢書では、カラー影印に翻刻を附し、当時の祭礼・風俗・各地の風景等をそのままの形で再現し、見て楽しめる資料とした。上巻には1～4月(第1～5冊)を収録。
- 第6巻 尾張年中行事絵抄 中** (第18回配本)
同上。中巻には5～6月(第6～9冊)を収録。
- 第7巻 尾張年中行事絵抄 下** (第19回配本)
同上。下巻には7～9月(第10～14冊)を収録。
- ★第8巻 張州年中行事鈔・尾張俗諺・尾張童遊集** (第2回配本)
「張州年中行事鈔」(鶴舞中央図書館蔵)は、前述「尾張年中行事絵抄」が天保期の成立であるのに対し、明和期の尾張の年中行事を明らかにする。「尾張俗諺」(蓬左文庫蔵)は、寛永～天保年間の尾張の諺をいろは順に並べたもの。「尾張童遊集」(久野保伯氏蔵)は、幼児の遊戯・わらべ唄を集録した「尾張童遊集」に「子もり歌・手まり歌」を合冊したもの。翻刻。
- ★第9巻 松濤棹筆(抄) 上** (第7回配本)
名古屋城に関するあらゆる事柄を集録した「金城温古録」(『名古屋叢書続編』第13～16巻)の著者として有名な尾張藩士奥村得義の随筆・雑纂集「松濤棹筆」の内、尾張関係の抄出本(鶴舞中央図書館蔵)の翻刻。上巻は江戸前期の記録が中心となる。
- ★第10巻 松濤棹筆(抄) 下** (第13回配本)
同上。下巻は江戸後期の記述が中心で、著者自身の体験・見聞を多く含む。巻末に上下巻の総目次を附し内容通覧の便を図った。
- ★第11巻 楽寿筆叢・続楽寿筆叢・十如是独言** (第8回配本)
紀典学の家系として有名な河村家の内、尾張藩書物奉行・文会書庫の創設者として知られる秀頼の随筆・雑纂「楽寿筆叢正・続」(鶴舞中央図書館蔵)、仏経解釈に自身の人生観・社会観から成る考察を加えた「十如是独言」(同)の翻刻。
- ★第12巻 笹の滴諸家雑談・家事雑談** (第1回配本)
明倫堂督学細野要章が天保15～明治6年の間にさまざまな階層の人々から聴取した事柄を筆録した「笹の滴諸家雑談」(蓬左文庫蔵)、要章の身辺の事柄を記録した「家事雑談」(同)を翻刻。幕末の尾張文雅人の側面史としても重要。
- 第13巻 天保会記(抄)** (第16回配本)
尾張藩士深田香実が、自身も属した趣味人の同好会「天保会」の天保元～嘉永3年の間の記録をまとめた随筆「天保会記」を、その高弟細野要章が抄出・編集したもの。神宮文庫本を底本として翻刻。後半は香実の身辺記事も多い。
- ★第14巻 金明録—猿猴庵日記—** (第12回配本)
高力種信の安永～文政年間の記事「金明録」(中村新三氏蔵)の翻刻で、一般に「猿猴庵日記」として有名(『名古屋叢書』第17巻に一部収録)。尾張の世相風俗・天候・祭礼等に詳しいが、本書は他の写本に比べて本文の異同が多く芸能関係記事が充実している点が特色。
- ★第15巻 尾張方言資料集** (第11回配本)
江戸中期成立「尾張方言」(蓬左文庫蔵)、江戸語との比較が特色の「水かはり(前編)」(加賀治雄「尾張方言」転載)、他国人の方言採取による「浪越方言集」(国立国語研究所蔵)、熱田宮宿周辺の方言を集録した「宮説言葉の掃溜」(岩瀬文庫蔵)、平安期の語を近世俗語で注釈した「雅語訳解」(山田久夫氏蔵)、近世俗語の成立を古典から解明する「俗語弁」(同)の六編の翻刻。
- ★第16巻 横井也有全集 上 発句・和歌篇** (第3回配本)
江戸中期の尾張藩重臣で俳人として有名な横井也有の全集。上巻には発句篇として「羅葉集」「ありづか」「後ありづか」「新ありづか」「羅の落葉」等、和歌篇には「雪窓百首」「羅窓集」を収録。共に初句索引を附載。
- ★第17巻 横井也有全集 中 俳文・俳論俳話篇** (第5回配本)
同上。中巻には有の字が發揮される俳文、俳論俳話を収める。俳文篇に「鶴衣」「続鶴衣」「鏡裏梅」等を収録し、各章題名索引を附す。俳論俳話篇に「短観録」「非四論」「くだ見草」「的なし」「晩台あられ句合」「随意草」等を載せる。
- ★第18巻(1)横井也有全集 下(1)連句篇・漢詩文篇** (第9回配本)
同上。下巻(1)には連句篇として「本のみ籠」「歌仙夏の空」「野有翁独吟集」「[也有連句集]」「俳諧漢和手引草」「[続義洋篇]」「俳諧漢和燈下吟」等に初句索引を附し、漢詩文篇として「羅隠集」「羅窓集余白」を収める。
- ★第18巻(2)横井也有全集 下(2)狂歌篇・談義篇・伝記資料篇・追加篇・参考篇** (第10回配本)
同上。下巻(2)には、狂歌編「行々子」、談義編「野夫談」「小車籠」を翻刻し、「也有大人即興漫書・半掃庵也有翁戯作」を影印で収録。伝記資料篇には「横井家譜・知行文書」「雲集 御自筆御覽書」「野双連句」「書簡」「俳諧夢の蹤」「也有年譜」等、追加編で上～下(1)の遺漏を補い、参考篇に「古主称賛録」「文照開書」を収載、巻末に研究文献目録を附す。
- ★第19巻 物品識名・物品識名拾遺・桑本草物品目録・泰西本草名疏** (第4回配本)
近世後期の尾張本草学関係書である、水谷豊文著「物品識名」「同拾遺」(蓬左文庫蔵)、豊文三回忌追善本草会の出品目録である「桑本草物品目録」(同)、スウェーデンの植物学者チュンベリー著「フロロー・ヤボニカ」を伊藤圭介が訳した「泰西本草名疏」(同)を影印で収録。後述2点は尾張藩献上本として美しい彩色画を載せるため、部分的にカラー影印とした。



第20巻 索引

なお第11～13巻をご担当いただきました編集委員杉浦豊治先生が昭和61年2月に、第8・15巻をご担当いただきました芥子川律治先生が同10月に御逝去されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

出版物一覽

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S . 50年刊)	3,500円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S . 51年刊)	4,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円
尾崎久弥コレクション目録第一～三集 (S . 52～55年刊)	各 1,500円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S . 53年刊)	2,000円
名古屋叢書続編 索引(S . 47年刊)	700円
名古屋叢書続編総目録(S . 44年刊)	400円
善本解題図録第一～三集(S . 55年再版)	各 300円
日本の古典<蓬左文庫図録>(S . 52年刊)	200円
蓬左文庫・源氏物語図録(S . 53年刊)	300円
蓬左文庫所蔵古地図複製 No.1～No.15(S . 55～61年刊)	各 1,800円
御本印型書鎖(S . 58年製)	1,000円
堀田文庫蔵書目録(S . 58年刊)	500円
蓬左文庫絵葉書<8枚組>(同)	300円
蓬左文庫図録(同)	1,500円

名古屋叢書三編第12巻(S . 56年刊)	3,000円
同 第8巻(S . 57年刊)	3,000円
同 第16巻(同)	3,000円
同 第19巻(同)	3,000円
同 第17巻(S . 58年刊)	3,000円
同 第4巻(S . 59年刊)	3,000円
同 第9巻(S . 60年刊)	3,000円
同 第11巻(同)	3,000円
同 第18巻(1) (同)	3,000円
同 第18巻(2) (同)	3,000円
同 第15巻(S . 61年刊)	3,000円
同 第14巻	
一金明録一 (同)	3,000円
同 第10巻	
一松濤棹筆(抄) 下一(同)	3,000円
同 第2巻	
一尾藩世記 上一(近刊)	3,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

利用ご案内

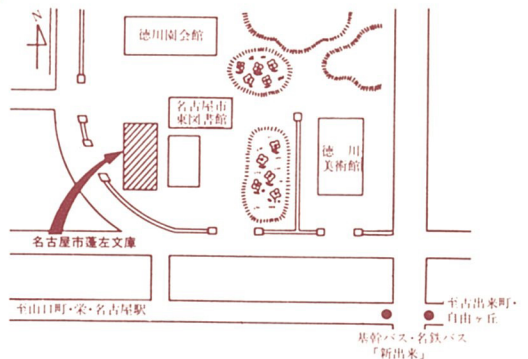
- ▷開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
 月曜 月・火休館
年末年始(12月28日～1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書 無料
 重要図書 有料(1部350円)
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

〔名古屋駅から〕市バス「基2」「自由ヶ丘」「猪高車庫」行
名鉄バス「本地ヶ原方面」行
〔栄から〕市バス「基2」「引山」「自由ヶ丘」
「猪高車庫」行
「新出来」下車、徒歩4分



「蓬左」第29号 ☆昭和62年1月17日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)